

小地域福祉活動事例集

Vol.1



社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

平成19年3月発行

はじめに

小地域福祉活動とは、自治会や小学校区など生活の場である身近な地域を単位として、誰もが安心して、生きがいをもった生活を送ることのできる地域づくりを目指して、住民が力をあわせて、また、社会福祉協議会等の専門機関と協力しあいながら地域の生活課題の解決を目指して進める、住民主体の福祉活動です。

小地域福祉活動には住民への福祉学習・啓発活動、福祉問題発見活動、ふれあい・交流活動、見守り・助けあい活動などがあります。特に滋賀県ではふれあい・交流活動の一つとしての「ふれあいいいききサロン」のとりくみのひろがりが見られ、高齢者サロンをはじめとして、県内約 1,500 の地域で特色のある活動を展開されています。

この事例集では、滋賀県内で取り組まれているサロンや助けあい活動、給食ボランティア活動など、6つの事例について、それぞれの地域の特色や力に応じて自分たちでできることを考えあいながら、活動されてきた経過や現状とともに、取り組む中での気づきや思いを紹介しています。

これらの事例を通して、これから自分の住むまちで福祉活動を推進しようとする方や既に活動をされている方々（民生委員児童委員、地域福祉推進員、福祉委員、自治会役員、ボランティアなど）が、小地域福祉活動をすすめていく上で大切な視点やポイントを感じとっていただき、今後の活動の参考にしていただけると幸いです。

目次

小地域福祉活動を進めるために	2
事例 1 大津市衣川台オアシス	3
～ “ほっと一息” …おしゃべりサロンを中心とした住民のふれあいの場づくり	
事例 2 彦根市城西学区社会福祉協議会	5
～社協はみんなのもの—ふれあいホールでの“よりあい”から生まれる地域の力	
事例 3 守山市中野自治会デイサロン「コスモス会」	7
～高齢者とボランティアのふれあいを大切にした共同の場としてのサロン	
事例 4 栗東市赤坂福祉会	9
～日常のちょっとしたお手伝いを…福祉ネットワークづくり	
事例 5 東近江市中野地区給食ボランティア	11
～笑顔と笑顔の交流—給食ボランティア活動の 22 年	
事例 6 虎姫町唐国福祉推進委員会	13
～サロンを始めて 18 年…サロンが地域の日常風景に	

小地域福祉活動を進めるために

◆小地域福祉活動は協働活動です

小地域福祉活動はひとりの力ではできません。地域の多くの人や団体が協力して活動することによって、一人ではできないことが可能になります。

そして、組織的な活動をすることで継続できる活動となり、地域に定着し、地域の暮らしになくてはならないもの（社会資源）となります。いざ、生活になんらかの課題が生じたときにも地域で安心して暮らすことのできる、安全網にもなります。

このため県内の多くの地域で、自治会、字を単位とした小地域福祉活動推進組織として「福祉会」や「福祉委員会」が、小学校区や旧町単位では「学区社協」「地区社協」が組織されています。

小地域福祉活動推進組織には、活動の担い手として「福祉委員」等を設置されているところも多くあります。地域の状況に応じて、福祉委員や民生委員児童委員、自治会役員、ボランティアなどがいろいろな形で協力し合って活動を展開されています。

◆活動の進め方のポイント

(1) みんなで意見や希望を出し合い、共有しましょう。

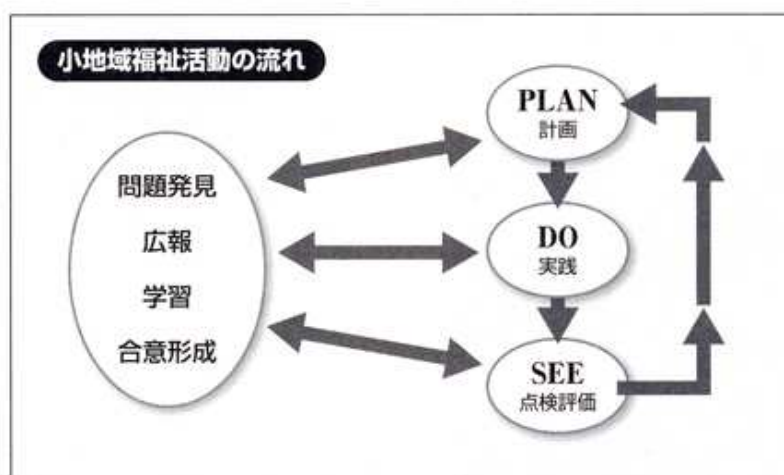
地域にあった活動をすすめていくために、「どんな活動がしたい?」「どんな活動が必要?」ということなど、地域のことについて地域の住民同士が話し合える機会をたくさんつくりましょう。

(2) 活動に参加する人・活動する仲間を増やしましょう。

地域には「人の世話が大好き」な世話焼きさん、仕事や趣味等でつちがった技能や知識、経験をもっている人がたくさんおられます。「口コミ」や「チラシ」などによる広報をとおして、協力してくれる人の輪を広げましょう。

(3) 地域の団体・施設・機関と連携して活動を進めましょう。

地域にはいろいろな団体や施設、機関があります。必要に応じて、これらと連携して専門的な協力やアドバイスなどをうけながら、幅広い活動を進めましょう。



大津市衣川台オアシス

～“ほっと一息”…おしゃべりサロンを中心とした住民のふれあいの場づくり～

地域の概要

衣川台オアシス（以下、オアシス）のある大津市衣川2丁目にはJR湖西線雄琴駅と堅田駅の中間地点に位置し、開発後約30年が経過した新興住宅地です。現在、365世帯、約1200人の住民が生活しており、高齢化率は約17%、50代以上の住民が約5割を占めており、今後、さらに高齢化がすすんでいく地域です。

【何か地域活動をしたい】との思いからはじまった活動

定年退職を迎える直前の男性を中心に、“サラリーマンから脱却して地域で活動したい、そのことが自分自身の生きがいにもなる”との思いからはじまったオアシスの活動。地域内に散歩の途中にふと立ち寄って休憩するところがあれば…との気づきから、平成13年に衣川台南自治会館を利用して、当時15人ほどのメンバーがあつまり、活動をはじめたのがきっかけです。

今では、民生委員児童委員、健康推進員、看護師、ホームヘルパー資格保有者など、22人の世話人が役割分担を行い、自治会館を開放して週1回（毎週木曜日10時～16時）のおしゃべりサロンを中心に活動を展開しています。



コーヒーを飲んで“ほっと一息”

おしゃべりを基本に楽しめる工夫を

おしゃべりサロンでは、お茶、お菓子を囲みながら“ワイワイ”“がやがや”おしゃべりする時間と組み合わせて“バッチワーク”、“座ってできるエアロビクス”、“歌いましょう”、“手芸”の時間などをその日ごとに設定され、参加者が楽しめる工夫をしています。指導者は、特技、資格をもつ地元住民で、オアシスの活動を支える力強い応援団です。オアシスの活動をつくりあげるなかで、世話人それぞれのつながりからいろんな形で協力者の輪が広がっています。

またおしゃべりサロンを通して、高齢者が日常の買い物に困っているという課題や広いお風呂で入浴したいという願いなどがあることがわかり、駅前スーパー、郵便局への買い物サポートや市営老人憩いの家やまゆり荘への入浴サポート（送迎）を実施しています。



買い物を終えて…

◆活動内容◆

おしゃべりサロン、買物サポート、入浴サポート、お食事会（年2回）、お花見会（年1回）、新春もちつき大会（年1回）、その他（講演会、施設入所者との交流会など）、手づくり野菜販売（無人販売）、リサイクル・アルミ缶回収、例会打ち合わせ会、お知らせチラシ配布

継続のための工夫・秘訣

これらの取り組みについては発足当初から自治会活動とは切り離し、世話人有志を中心に進める形をとり、一方自治会館の使用では、自治会の全面的なバックアップを受けながら活動を進めていることが特徴です。さらに世話人が月1回定期的に集まり、活動をふりかえり、「こんなサロンになったらいいな」という思いを共有しながら、次の月の計画をみんなで立てていることが週1回のおしゃべりサロンの継続の原動力となっています。

また、「おおつげんきくらぶ[®]」の助成を3年間受け、備品整備や活動基盤の充実を図ってきました。助成終了後は、おしゃべりサロン以外の活動への参加費収入とともに、月1回のアルミ缶回収の収益(年間12~13万円)を中心に、学区社協からのふれあいサロン配分金、歳末助け合いの助成などを活用して活動をすすめています。

コラム

活動のひろがり、まとめ

活動を続ける中で、オアシスの事業として取り組み始めましたが、現在は、オアシスとのつながりを保ちながらも、独立して活動を展開しているものがあります。その一つとしての公園愛護会は、男性を中心とした自治会内の公園や史跡古墳の除草・清掃をしているグループです。また育児サークルについては、当初、子どもとその親、高齢者が交流する場をつくろうという思いでオアシスが始めたものですが、今はお母さんを中心に地域の人がサポートをしながら、月1回活動を続けています。その他、子ども野菜クラブの活動も継続して行っています。

また、オアシスの取り組みをきっかけに、「座ってできるエアロビクス」同好会—衣川台シルバーズの活動や謡同好会の活動が展開されています。衣川台シルバーズ参加者の最高年齢は89歳。衣川台シルバーズは地元の舞台や県、全国スポーツレクリエーション大会への参加、地元の施設への訪問交流などを通して、元気に生き生きと活動しています。



“座ってできるエアロビクス”の一場面

オアシスのめざすもの、今後に向けて

月1回、衣川台オアシスだよりを世話人が分担して全戸配布し、活動内容のPRをしているものの、サロンに参加されない高齢者(特に男性)も少なくないことから、より働きかけを強めていく必要性を感じています。

また活動を通して見えてくる地域の課題への対応について、「防災や見守り、団塊世代の退職者の居場所づくりなど、地域にはいろいろな課題があるが、オアシスの事業として何もかも取り組むというのではなく、自治会や地域のその他の組織とも連携し、検討しあい、縦と横のつながりを取りながら、自治会として取り組むこと、オアシスとして取り組むことをそれぞれ考えていくことが大事である」と代表者は話しています。

今後もオアシスとしては“衣川台を散歩の途中に休憩し、友だちや住宅地の人たちとおしゃべりをして、ほっと一息入れる場所”としてのおしゃべりサロンの活動を基本に、世話人全員が地域の課題について考えあひながら、いろいろな人の出会い、助けあう組織づくりをすすめていきます。

※「おおつげんきくらぶ[®]」とは、大津市が事業主体で大津市社会福祉協議会が委託を受け、高齢者支援を中心とした市民活動を応援するために、100万円を限度に最大3年間の財政的支援とともに事業内容や会計処理の助言等、事業全体の支援を行う助成事業です。(この事業は、平成13年から5年間実施されていたもので、現在は実施されていません。)

彦根市城西学区社会福祉協議会

～社協はみんなのもの～ふれあいホールでの“よりあい”から生まれる地域の力～

まちに新たな息吹

彦根市城西学区は彦根城の城下町。伝統的な町並みを生かしつつ町に新たな息吹を吹き込もうと、市民参加による中心市街地再活性化事業がすすめられています。城西のまちづくりは、少子高齢化が進み、コミュニティの維持がむずかしくなりがちな中心市街地に、いきいきとした市民の動きを呼び戻すチャンスとなりました。

ふれあいホールでよりあいをする楽しさ

学区民の活動拠点はふれあいホール。ホールは城西小学校の2階にあります。平成7年に小学校創立100周年を記念して同窓会がプレゼントした施設で、同窓会が運営を任されています。

学区社会福祉協議会（社協）のよりあいの場も、もちろんこのホール。老人クラブも自治連も、PTAも子ども会も、マーチングバンドの練習も、総合学習のプログラム「子どもらと楽しもう会」も、とにかく、学区民がよりあって会議やら趣味活動やら何でもできる場なのです。気楽に入れて、ほっこりできて、ここに集まるとみんなどんどんアイデアを出してくれる。地域活動のよりあいをしやすい学区になったのはこのホールのおかげです。



シルバーフェスティバル

シルバーフェスティバルと春のつどい

9月の城西シルバーフェスティバルは学区社協の一大行事。単なる敬老会ではありません。だれかがやってくれる行事ではなく、催しを地域のみんなで考えてつくっていかうと11年前に再出発したこの行事が、みんなと一緒にやっていく社協の出発点になりました。このときから、行事ごとに地域のいろいろな団体で実行委員会をつくり、ふれあいホールでよりあいをしながら一つひとつの行事をつくりあげていくという城西スタイルができあがりました。

これに対抗するのが3月の春のつどい。会場は城西小学校体育館です。福祉活動のボランティアグループ、健康づくりのグループ、趣味活動をしている人、防災や防犯活動をしている団体、子ども会。いろいろなことをやっている人々がみんな集結するこのつどいは、学区民が活動を発表しあえる場、新しい出会いの場、子どもや若い父母が地域の人と知り合う場、社協活動への参加者をひろげる場となりました。

4年前から始まったこの行事は、「来年は私も入れて」という声が自然とあがり、各団体が自ら提案して、協力して運営する行事に成長しました。出て行って楽しい場所づくり、出にくい人にオープンにしていくことが目標です。



春のつどい

城西小学校の学校だよりから

城西学区「春のつどい」

3月3日(土)ひな祭りの日には、素晴らしい天候に恵まれ、PTA ウィークエンドクラブ、城西学区連合自治会、社会福祉協議会の共催による春のつどいが実施されました。関係の皆様には大変お世話になりました。体育館ではマーチングバンドの演奏で始まり大道芸や手作りお菓子、レクダンスやコーラス、さらにはスーパーカロムや折り紙や絵作り、壁新聞や介護用品の紹介、外では消防自動車やパトカーの乗車体験等盛りだくさんの催し物をしていただき多くの子どもたちが有意義な時間を過ごすことができました。また、人権教育推進協議会から依頼を受けて人権に係る子どもたちの作品の中から5年生の若林奈織さん山口春奈さん北村杏奈さんの3人作詞の「ハッピーな世界」の歌をみんなで合唱しました。歌のように人権を尊重する風土をいつまでも持ち続け明るく楽しい城西学区にしたいものです。(城西小学校学校だより「城のこだま」から)

実行委員会方式でつくりあげるさまざまな行事

城西学区社協では、シルバーフェスティバル、春のつどい以外にも年間を通して多くの行事をしています。なぜ行事なのでしょう。

今はどの団体も組織の維持が難しくなっています。人と人のつながりも弱くなりがちです。自治会でも団体でも一つのところで何かをしようと思うと、同じ人に何度も役が回ってきます。内容もマンネリになりがちです。でも学区全体で考えてみると、実に多くの団体があり多くの人材がおられるのです。行事ごとにいくつもの団体が参画してよりあいをしているうちに、ふだん引き出しのなかに納まっている人をだれかが引っ張り出してきてくれるのだそうです。

このような形でつくりだされる数々の行事が、住民の主体性を高め、出会いとつながりをつくり、地域のムードを生み出してくれます。また、学区での行事をお手本にして自治会でもやってみようという声があがります。社協が声をかけることによって地域の団体とそこにつながる地域の人を結んでいける—これが協議会という社協の組織のよさ。

そして、このような取組みをとおして福祉への理解がひろがる。そのためには多くの行事を続けていくことが大事なのです。

無理なく運営していくために、平成18年度から副会長を二人増やし、行事担当を複数体制にしました。また、行事ごとに各団体の役割と出番を決めて徹底した分担体制をつくり、よりあいには各団体かならず複数参加するようにしたことで継続性が確保されました。

◆年間のおもな活動◆

シルバーフェスティバル、春のつどい
彦根西高校生と在宅高齢者との交流を深める会
在宅高齢者への歳末友愛訪問
世代交流のおもちつき会(お正月を学校で遊ぼう)、高齢者とのふれあいサロン
夏休み!子どもと親らとの家族料理教室
グラウンドゴルフ交流会
城西小学校総合学習「子どもらと楽しもう会」

城西のこれから

城西学区社協では、今、地域福祉は家族というものをテーマに取り組むときだと考えています。家族のつながりづくりをまちぐるみで応援していこうと、いろいろなアイデアが集まってきています。子どもや若い親世代が、成長していくなかでじんわりと「城西にいてよかった」と地域のことを思ってくれるような取組みを続けていくこと。そして、12年間ずっとボランティアとして福祉活動に取り組んでいる「友愛会」のように、自分の健康づくりや楽しみをみつけながら地域のために力を貸せる人たちを増やしていくこと。こんな道づくりができるのは社協ならではの「ふれあいホール」の“よりあい”はまだまだ続きます。



子どもと親との家族料理教室

守山市中野自治会デイサロン「コスモス会」

～高齢者とボランティアのふれあいを大切にした共同の場としてのサロン～

地域の概要

守山市の中野自治会は、琵琶湖大橋取り付け道路の整備にともない、昭和40年代後半から宅地開発が進んだ地区と古くからある集落からなる地域で、「誰もが安心して暮らせる自治会活動」を目指し、新しく迎えた住民とのまちづくりを進めています。高齢化率は11.9%と守山市の他の地域と比べても低い方ですが、移り住んで30数年経つ住民も高齢者と呼ばれる世代になりつつあり、今後高齢化率が高くなるのは避けられない状況です。

立ち上げのきっかけ

そのような状況の中、市社会福祉協議会(社協)からの「自治会でもサロンを」という働きかけから、中野自治会でも平成11年に民生委員・福祉協力員・健康推進員等のグループが自発的に「ミニサロン茶話会」を開いて、手作りおやつで高齢者と午後の楽しいひと時を過ごされました。その後、平成14年の「健康生きがいデイサロン」準備委員会で自治会役員、在宅支援センター、市社協職員の意見を聞きながら、「健康と生きがい・仲間づくりと引きこもり・寝たきり予防」を目的として、高齢者を対象に、民生委員・福祉協力員・健康推進員の手によって、デイサロン「コスモスの会」を立ち上げました。

「コスモスの会」は、自治会内で組織された健康福祉部会の活動として行われています。健康福祉部会は、「地域全体の理解を進める組織」という位置づけで、赤十字奉仕団、更生保護女性会、エルダー婦人会、老人会、小・中PTA、子ども会、自治会三役、担当協

議員から構成されており、サロンは自治会の事業という位置づけになっています。



すこやか体操で身もこころも元気に

負担にならない活動、負担を感じないボランティア活動

サロンの実際の活動を担っている24人のボランティアのほとんどは民生委員や健康推進員ですが、地域の人はみな平等で、同じ立場であるという想いから、そのような肩書きを抜きにして活動をしておられます。そのため、役職の任期が終了した後も継続してサロンに関わっておられる人がほとんどで、ボランティア同士の強いつながりができています。

「高齢者とボランティアのふれあいを大切にしながら、“負担にならない活動、負担を感じないボランティア活動”をモットーに、ボランティア同士の交流を重視するのが、活動を続けていく秘訣。参加されている方が楽しく過ごすためには、ボランティア自身が楽しくないといけない。」と自治会長。

市の出前講座や市社協のボランティアの支援を得ることにより、ボランティアの負担をなるべく軽減するように工夫されています。またボランティアは「来ていただいた方から「楽しかった」といってもらえることが一番うれしいし、励みになる。それで次も頑張ろうという気持ちになる。」と話します。ボランティ

アも含め参加者全員のおしゃべりや笑いがサロンを続けていく秘訣になっています。



交通指導員による寸劇の様子

その他にも、毎月1回発行している「コスモスの会だより」を、地域の見守り活動も兼ねて、ボランティアが近所の高齢者がいるお宅を5～6件直接訪問して配布しており、併せて、サロンへの出欠の確認も行っています。これも、高齢者とのふれあいを大切にしておられることが活動に現われています。また、見守りの情報を地域の民生委員と共有することによって、民生委員活動にも役立てています。

◆サロンの1日の流れ◆

- 10:30 受付・すこやか体操・血圧測定
- 11:00 健康管理・介護予防など
ためになる講座
- 12:00 おしゃべり食事会(季節折々弁当)
井戸端会議・フリータイム
- 13:00 折り紙・ゲームなどお楽しみ
喫茶タイム
- 14:00 散会

今後の課題

自治会長が以前からサロンの課題として感じていたのは、日頃の健康管理、介護保険の利用、健康づくりについての専門知識の学習やおしゃべり仲間・相談相手がいない人への配慮の必要性でした。また、サロンを続けることで新たな課題も見えてきました。それは、サロンの参加者に要介護の方がおられる中で、事故が発生した時のボランティアの責任や対応の仕方などといった地域でできることの限界についてでした。

要支援者・要介護者を支援するボランティアは、「サロンで転倒して怪我をしたり、食べ物で誤嚥してしまう恐れもある中、そういった事態になったときに私たちでは対処で

きないし、研修等でボランティアの専門性を上げるにしても負担になってしまえば、気軽にボランティアができなくなってしまう。」「要介護の方はサロンに来ることをお断りするのよいか、でも自治会のサロンなのに来たいと言っている方を断るのは気がひける。」との声がありました。

要支援・要介護の方をどのように地域で見守るのか、支援していくのかなどサロンの担い手やボランティアにとって悩みは尽きませんが、「地域の高齢者は地域で見守っていきこうという動きの中で、行政・施設ですべきことと地域ですべきことの境界線がわからなくなってきている。地域でできることは地域で、行政・施設でやらねばならないことは行政・施設でというように、きちんと役割を分担して課題に取り組まなければいけない。」と自治会長はおっしゃっていました。



介護予防教室の様子

◆平成18年度活動内容◆

	午前(10:30～12:00)	午後(12:00～14:00)
4月	館外研修「安心安全、福祉用具あれこれ」(草津市笠山)	
5月	介護保険「包括支援センターの役割」	「水保そば定食」・みんなで歌おう
6月	楽しく聞こう音楽療法	「七夕かざり」・頭の体操
7月	「食事と健康」健康推進員	パズル・カード合わせ・かき氷
8月	井戸端会議「隣近所のおつきあい」・手作りゲーム	
9月	中野自治会「長寿祝賀会」(コスモスの会お休み)	
10月	回想療法「むかし話、新しい発見」	「かくし芸大会」(ボランティア)
11月	介護予防「認知症って…なに!!」	介護予防ゲーム・焼き芋
12月	「年忘れお笑い劇場」(ボランティア)	折り紙「お正月飾り」
1月	老人会新年会(コスモスの会お休み)	
2月	健康づくり「口腔ケア」	折り紙「ひな人形作り」
3月	「安心・安全生活道路マップ」駐在所	交通指導員寸劇

栗東市赤坂福祉会

～日常のちょっとしたお手伝いを…福祉ネットワークづくり～

地域の概要

栗東市の赤坂地区は、新興住宅団地として昭和48年に自治会が発足しました。発足当時は20～40歳代が全人口の約5割を占めていましたが、30年余り経過した現在では、その年齢層がスライドして、50～70歳代が全体の半数を占める人口構成となっています。

福祉ネットワークづくりから始まった住民福祉活動

そんな中、平成10年に、歴代自治会長、副会長、老人クラブ会長、婦人部長、地域振興協議会福祉部会員、民生委員児童委員が中心となって、「福祉ネットワークづくり」の計画を立ち上げました。まず取り組みに当たって、みんなが高齢化社会に対するネットワークの必要性を認識することが大切なため、栗東市社会福祉協議会の協力を得ながら、福祉活動の必要性についてPR活動を数回行い、福祉座談会を開催しました。その後、福祉ボランティアを募り、平成12年3月に「赤坂福祉会」（当初、赤坂ボランティアグループ）が発足しました。

赤坂福祉会は、自治会内の有志をもって組織し、地域の住民、特に高齢者や子どもとその家族が安心して暮らせる福祉のまちづくりのために、それぞれの特技を生かし、



高齢者の皆さんとお花見会

力を合わせて推進するという方針のもと、主に高齢者福祉の問題に対して、協力し

て活動を行っています。具体的には、「お花見会」、「ふれあいサロン」や「ミニサロン」（独居、2人世帯老人のつどい）などを定期的に開催しているほか、けが、防火、防犯、悪質勧誘等の緊急事態に備える安全知識を高齢者と会員ボランティアと一緒に学ぶ研修会を消防署で行ったり、会員同士の情報交換や研鑽のために月例会を開催し、その中で、まちづくり、防災、介護予防、生活習慣病および悪質商法等に関する新しい情報をビデオ学習会形式で勉強しています。

また、支援活動として、毎年12月に「赤坂福祉の日」を設けて、独居等世帯のうち希望者宅の屋内外清掃や電気、水道および防犯・防災器具の簡易点検修理などを行っています。そのほかにも、団地内の安全点検を行い、道路や歩道、側溝および建造物の改善要望を関係機関に対して行ったり、友愛訪問と見守り活動、買い物や家事等の手助け活動を日常的に実施しています。



団地内の安全点検風景



取り組む上で大事にしていること

活動時の留意点として、①会員の活動については、あくまでもできる範囲内で会員自身に無理のないように行うこと ②支援対象者のプライバシーを守る ③相手の自立を考える。手を貸しすぎるのも問題（小さな親切、大きなお世話にならないように）の3つの点を大事にしています。特に①については、支援する側もされる側も、お互いに楽しく、負担にならないようにしなければ、良い関係が築けませんし、活動を継続していくことが難しくなります。



また、地域の中には、いろいろな知識や能力を持った方がたくさんいます。このような人材情報をみんなが共有することで、必要な支援を支援できる人につなぐことが可能になります。情報を共有するためのひとつの方法として赤坂福祉会では、要支援者とボランティアの位置が一目で分かるよう「福祉ネットワークマップ」を作成し、随時情報を更新しています。そのほか、会員の中の多くは、他の趣味クラブ、例えばコーラス、パソコン、手話教室、絵画教室、グランドゴルフ等に参加し、互いに学びながら親睦を深めています。

課題となっていること

現在の会員構成は、発足当初からのメンバーが多く、会員自身の高齢化がすすむ中、次の世代にどう引き継いでいくかが大きな課題です。若い人たちに活動の内容を理解してもらい、自分たちのこととして活動に参加してもらえよう、情報誌を発行して

PRに努めたり、子どもたちとのふれあい活動を行ったりして、活動の輪を広げる取り組みを行っています。

また、老人クラブとの関係で、ボランティアや対象者が重複する部分があり、動く人が同じである場合も多く、それぞれの活動内容について調整する必要がでてきているという課題もあります。

今後の取り組みについて

住民同士のつながりづくりの「場所」があることは大事なことです。そういう「場所」のひとつとして、サロン活動を続けていきたいと考えています。また、サロンは情報を得る場にもなっています。個人情報保護の関係で情報が得にくくなっているなか、支援を必要とする人の所在や、緊急時の連絡先などを地域で把握しておくことが必要になる場合があります。そういった情報もサロンを通じて信頼関係を作っておくことでご本人や家族から得やすくなります。

赤坂福祉会の大きな役割は、暮らしの安全を自分たちで守っていくことです。そのために、これまで築いてきたことをこれからもしっかりとつなげていくための取り組みを行っていきます。

◆年間行事計画例◆

月	行事
4	高齢者とのふれあい花見会、福祉会幹事会 会員研修月例会
5	福祉交流会、ミニサロン
6	福祉会幹事会、会員研修月例会
7	ふれあいサロン
8	救急体験教室
9	市内史跡探訪（ミニハイキング） 高齢対象者及び希望者と一緒に健康研修
10	福祉会幹事会、会員館外研修
11	記念赤坂ふれあいサロン
12	出前奉仕作業
1	会員研修月例会
2	福祉ミニサロン
3	会員研修月例会（反省会）

東近江市中野地区給食ボランティア

～笑顔と笑顔の交流～給食ボランティア活動の22年～

中野地区の概要

東近江市中野地区は旧八日市市の南西部に位置し、27自治会からなる地区で、昔ながらの地域と新興住宅地が混在しています。平成19年3月1日現在の世帯数は2,763世帯、人口は7,399人、高齢化率は約16%という地域です。

女性民生委員の発想から生まれた活動

昭和59年に当時の女性民生委員3名が立ち上げた「中野地区老人給食ボランティア」。一人暮らしのお年寄りが何を望んでおられるのか、自分なら何をしてもらったら嬉しいか、と民生委員それぞれが思いをめぐらせ、話し合いをすすめたことから、この給食ボランティア活動が生まれました。

活動が始まって22年。現在では女性民生委員を中心に会の運営を行い、中野公民館を拠点に地域の給食ボランティア36人が手づくり弁当の調理、配食などの役割分担をしながら、活動を続けています。



公民館の調理室でメンバーが調理

「おふくろの味」を届けて、心と心の交流を

現在、70歳以上の一人暮らし高齢者、75歳以上の高齢者世帯あわせて116人を対象に、月2回の給食サービスを実施。手づくりのお弁当に季節の便りを添えて、夕食前に各戸に届ける活動をしています。

献立については、ボランティアが集まり月初めに会議を行い、メンバーの知恵を出しあって、中野地区自慢の「おふくろの味」を受け継いでいます。

配食については、見守り活動の一環として、民生委員が利用者に給食日のお知らせを配布し、1回目の配食を行います。2回目の配食はボランティアが担当する形となっています。

配食当日は食材の買い出しに公設市場へ行き、午前中は下ごしらえ、午後から調理をします。配食に出かける時間は16時頃になります。

その時間になると、玄関で待っていてくれる方がいます。育てている花の話、飼い猫の話、その日の体調の話など、笑顔で少しの時間も惜しんで話をされます。また「季節の便りを毎回楽しみにしています」「次の献立は何かと心待ちにしています」といった声も聞かれ、ボランティアにとって活動の励みとなっています。

◆献立の一例◆

平成19年1月30日	平成19年3月13日
・ごはん	・ちらし寿司
・豚肉の生姜焼き	・さごしの塩焼き
・白和え	・マカロニサラダ
・カボチャの煮物	・きんぴらごぼう
・煮抜き卵のスープ煮	・とろろく豆の甘煮
・イチゴ	・ミニトマト
・レタス	・ブロッコリー



手書きの季節の便りが添えられたお弁当

笑顔に出会えるのを楽しみに

これまで活動が継続できたキーワードは“笑顔”。「お年寄りとの楽しい会話。またボランティア自身の笑顔、ボランティア同士のつながりの輪の存在が大きい」と代表は話します。

新しくボランティアに参加したいという人を迎えながらも、高齢になっても引き続きボランティアとして活動しているメンバーもいるなかで、献立会議などを通じて、互いに意見を出し合いながら、その知恵と味を活かした給食づくりを進めています。

メンバーもそれぞれに、調理方法などをいろいろ研究しており、互いに調理方法などを勉強もさせてもらえることが楽しみにもなっています。ボランティアの研修や旅行・親睦会も開催し、ボランティアが笑顔で活動を続け、その輪をつなげていく工夫をしています。



お弁当を届けて、笑顔と笑顔の交流

工夫を重ねて、よりよい活動の継続を

活動を続けているなかで、いくつかの課題が出てきています。その一つはボランティアの平均年齢が高くなり、世代交代をすすめ

ていくことの難しさを抱えていること。もう一つは地域によって配食ボランティアの人数に偏りがあり、ボランティアを中心に配食を進めるのが難しい地域もあることです。

また月2回の配食のほか、利用者みんなで食事、ゲームなどをして楽しく過ごす場として「ふれあいサロン」をおおむね年1回開催していますが、足腰が悪いので参加されない人や、これまで話したことのない人と出会うことが苦手な人もいることから、参加者が半数程度にとどまり、サロンの持ち方に苦慮している状況があります。サロンについては事前に参加意向についてアンケートを行うなどしながら、持ち方を考えていくことが必要となっています。

配食を通して利用者一人ひとりの様子がわかっているからこそ見えてくるこれらの課題に対して、代表は「ボランティアのチームワークを大切にし、心の通い合う、温かい地域福祉の取り組みの一つとして活動を継続できれば…」と考えています。

これからも課題の一つひとつを見つめ、ボランティアが考えあうとともに、献立についてのアンケートにより利用者の思いを引き出すなど、さらに工夫を重ねながら、中野地区としてよりよい給食ボランティア活動を続けていこうとしています。

1. 配食利用者

中野地区在住者の
一人暮らし老人 70歳以上 (76人)
老人世帯2人共 75歳以上 (40人)
合計 116人

2. 献立会議

月初めに当番ボランティアがその月の献立を立てる

3. 給食の実施

実施日：月2回・夕食として配食
(原則として第2、4火曜日)
配食者：1回目・民生委員
2回目・給食ボランティア

4. 配布物の作成

月初めに対象者へ給食日の案内文を配布
給食の弁当に当日の献立と季節の便りを添付

5. その他の活動

- 「ふれあいサロン」の開催
- 年度ごとの活動記録冊子を作成
- サマースクールの給食ボランティア

からくに 虎姫町唐国福祉推進委員会

～サロンを始めて18年…サロンが地域の日常風景に～

地域の概要

山内一豊が越前朝倉攻めの功績を認められ、織田信長から近江唐国 400 石の知行を与えられました。これが現在の虎姫町唐国区です。

約 80 世帯、340 人の字で、幾度となく水害に見舞われ、集落が移転するという歴史をもちます。武烈天皇の遣いとして現在の韓国に渡った領主、唐国の連にちなんで「唐国」と名づけられたといわれています。

「アメニティ唐国」の発足

平成元年に「アメニティ唐国」というボランティアグループが発足しました。このグループは、現在の唐国福祉推進委員会・委員長（小崎春生さん）が、「唐国が一つにつつまれるような活動を、気楽に参加して言いたいことを言いあえるような場所をつくりたい」と考え、仲間に声をかけ、12～13 人の賛同を得て発足したものです。

アメニティ唐国には、活動部、広報部、福祉部の 3 部が設置されました。

このうち福祉部では、月 1 回、区内の高齢者が区の集会所である唐国会館に集まり、茶話会やゲーム、子どもとの交流などの活動を行いました。高齢者が子どもたちに縄縫い、草履づくり、竹馬、竹とんぼづくりなどを教え、子どもたちは目を輝かせながら作っていたそうです。この活動がサロン活動の原型となります。

唐国福祉推進委員会の発足

●福祉推進委員会の発足の経過

平成 6 年に町社会福祉協議会（社協）から、各字で小地域福祉推進委員会を設立してほしいと呼びかけがありました。唐国区では区役員とアメニティ唐国の役員が相談をして、平成 7 年からアメニティ唐国の活動を休止し、唐国福祉推進委員会を設立することになりました。

●福祉推進委員会の構成

唐国福祉推進委員会は、区とは独立したボランティア組織ですが、連携が大切であるため区長を総括とし、区長が福祉推進委員を委嘱します。委員は区の協議委員（役員）、老人クラブ、女性会、教育委員長、民生委員児童委員、ボランティア委員の合計 35 人で構成されています。

委員の任期は 1 年ですが、任期終了に伴う交替は前提にしていません。何よりも意志のある方が活動を担うことが大切であることから、再任を繰り返しながら継続しているのです。

サロンは、このメンバーを 5 つの班に分けて担当制にしています。1 班あたり年 2 回担当することになります。班は幹事 2 人と委員 4～5 人の体制で、サロンの内容は、幹事がメンバーを招集し班ごとに決めます。



有資格ボランティア委員の血圧測定、健康相談

● ボランティア委員

唐国福祉推進委員会で特徴的なのは、ボランティア委員 25 人の存在です。各班に必ず看護師や保健師の資格をもつボランティア委員が配置されています。これらの有資格者は、30 歳～40 歳代の仕事に就いている方が中心です。したがって、サロンは土曜日か日曜日に開催されます。

ボランティア委員は、委員長が唐国区の“人材”を発掘しているということです。25 人中 10 人の方が 30～40 歳代ということです。これは、サロンを担う後継者の育成というねらいもあるそうです。このボランティア委員は随時募集されています。

サロン活動の内容

● 月 1 回週末に開催

サロンは、唐国会館を拠点にして、区内の 75 歳以上の方を対象に、月 1 回、土曜日か日曜日の 9 時から 11 時 30 分にかけて開催されます。

まず、有資格のボランティア委員の血圧測定から始まります。参加者の血圧測定と併せ健康相談も行います。

そして、座ったまま、歌を歌いながら身体をほぐす健康体操を行い、サロンを担当する班が決めた、その日のメニューへと移ります。

主な内容は、社協や役場の職員を講師に招いた出前講座や“百歳万歳”などテレビ番組を録画したビデオ鑑賞、ビンゴゲームや自作の紙芝居、カルム、ニュールーレット・



軽く身体をほぐします



屋外でゲームを楽しんでいます

囲碁ボールなどの遊具を使った遊びです。

その時々季節にあったメニューも実施され、たとえば、7 月は七夕飾り、8 月は五村別院の夏中法要のお参りとお出かけ。9 月には委員会をあげて寸劇の台本、

衣装、食事など、全て手づくりで真心のこもった敬老会が開催されます。12 月にはみんなで年賀状を書いたり、冬場は子どもたちと一緒に縄跳いや昔の遊びをしたりします。

サロン運営に必要な経費は、唐国区と町社協からの助成金に加え、寸志などの寄付金を合わせて年間約 22 万円で運営されています。

なお、唐国のサロンは、基本的には食事を出しません。サロンを開始した当初は、お昼ご飯を出したらたくさん参加してくれるのではないかと考え、参加者に弁当を持参してもらっていたそうです。

しかし、「ごはんが硬い」「天婦羅が多い」などの不満の声が出て、やめたということです。お弁当をやめても参加者は減らず、お菓子だけで充分ということがわかったということです。

● 休んだ人への一声

サロンを欠席した人は、委員長が訪問をし、その日のサロンの報告などを行います。あまり大勢で訪問すると訪問される側も大変ということで、一人で訪問をしています。

委員長は「サロンをやっているから、欠席のときはもちろん、普段でもお邪魔しやすい」と話します。サロンは、つながりをつくる場であることがよくわかります。

サロンが続く秘訣

唐国区では、アメニティ唐国での取り組みを含めると、サロンは現在まで 18 年続いています。これはおそらく県下でも最も長い歴史をもつサロンの一つといえます。

続く秘訣は何でしょうか。

委員長は「特に秘訣はない」とおっしゃいます。そして「サロンは唐国の日常風景になった。マンネリと思ったこともない」ともおっしゃいます。確かに、日常風景は、普段の暮らしで見慣れた景色で、それをマンネリとは言いません。

サロン活動が続くと「マンネリになりがち」という悩みが出てきますが、そのサロンはその地域の日常風景になったという証なのかも知れません。

各事例の詳細については、それぞれの市町社協へ問い合わせください。

県内市町社会福祉協議会名簿 (平成19年3月現在)

社協名	〒	住所	電話番号
大津市社会福祉協議会	520-8530	大津市浜大津4-1-1 明日都浜大津内	077-525-9316
彦根市社会福祉協議会	522-0041	彦根市平田町670 福祉保健センター別館	0749-22-2821
長浜市社会福祉協議会	526-0037	長浜市高田町12-34 社会福祉センター内	0749-62-1804
近江八幡市社会福祉協議会	523-0082	近江八幡市土田町1313 総合福祉センター内	0748-32-1781
草津市社会福祉協議会	525-0034	草津市草津3-13-25 旧市役所庁舎内	077-562-0084
守山市社会福祉協議会	524-0013	守山市下之郷町592-1 福祉保健センター内	077-583-2923
栗東市社会福祉協議会	520-3015	栗東市安養寺190 総合福祉保健センター内	077-554-6105
甲賀市社会福祉協議会	528-0005	甲賀市水口町水口5609 水口社会福祉センター内	0748-65-6370
野洲市社会福祉協議会	520-2413	野洲市吉地1127 中主ふれあいセンター内	077-589-4683
湖南市社会福祉協議会	520-3234	湖南市中央1-1 社会福祉センター内	0748-72-4102
高島市社会福祉協議会	520-1121	高島市勝野215 高島市役所高島支所2階	0740-36-8220
東近江市社会福祉協議会	527-0016	東近江市今崎町21-1 八日市福祉センター内	0748-20-0555
米原市社会福祉協議会	521-0023	米原市三吉570 米原地域福祉センターゆめホール内	0749-54-3105
安土町社会福祉協議会	521-1342	安土町上出908-1	0748-46-2571
日野町社会福祉協議会	529-1602	日野町河原1-1 勤労福祉会館内	0748-52-1219
竜王町社会福祉協議会	520-2552	竜王町小口4-1 福祉ステーション内	0748-58-1475
愛荘町社会福祉協議会	529-1313	愛荘町市731 福祉センター愛の郷	0749-42-7170
豊郷町社会福祉協議会	529-1161	豊郷町四十九院1252 豊栄のさと内	0749-35-8060
甲良町社会福祉協議会	522-0244	甲良町在士357-1 保健福祉センター内2階	0749-38-4667
多賀町社会福祉協議会	522-0341	多賀町多賀221-1 総合福祉保健センター内	0749-48-8127
虎姫町社会福祉協議会	529-0141	虎姫町宮部3445 福祉保健センター内	0749-73-2656
湖北町社会福祉協議会	529-0341	湖北町速水1860 地域福祉センターさわやかホーム内	0749-78-2144
高月町社会福祉協議会	529-0262	高月町西物部73-1 老人福祉センター内	0749-85-5700
木之本町社会福祉協議会	529-0423	木之本町千田53	0749-82-5419
余呉町社会福祉協議会	529-0515	余呉町中之郷2434 余呉やまなみセンター内	0749-86-8109
西浅井町社会福祉協議会	529-0701	西浅井町塩津浜1795 保健福祉センター内	0749-88-8181

滋賀県社会福祉協議会	525-0072	草津市笠山7-8-138 長寿社会福祉センター内	077-567-3920
------------	----------	--------------------------	--------------